

濱谷正晴著

## 『原爆体験』

——六七四四人・死と生の証言』

評者：谷 富夫

《この本を手に取り、表紙をめくってくださった方へ。あなたは、〈原爆体験〉という言葉が聞かれたことがあるだろうか？》

本書の冒頭、第一行目で読者に向けて発せられるこの問いかけに、著者の願いと本の性格が端的にあらわれているように思われる。社会学者が、「原爆体験」を専門分野を越えて広く世に伝えたいと願っている。

本書で「原爆体験」なる言葉には、次の三つの含意がある。1. 広島・長崎の体験を指してよく使われる「被爆体験」という呼称には、人びとが何に被爆したのかが明示されていない。2. 「原爆体験」は、被爆当時の体験のみによって形づくられているわけではない。被爆当時から現在まで、原爆に被爆した人びとの身に起こったすべてのことが包み込まれていなければならない。3. 体験とは決して受動的なものではない。被爆者たちが辿らされた惨苦の生は、原爆に押しつぶされまいとする闘いの日々にはかならなかった（本書、v頁）。

かかる「原爆体験」を広く知ってもらいたいとの著者の願いは、きっと読者の心まで届くに違いない。なぜならば、確かなデータを基に語っており、その言葉は平易であり、ただ一つの

仮説に焦点を絞って本をコンパクトに仕上げている、そして何よりも、一つの「精神」（M.Weber）に支えられているからである。「精神のない専門人」の声が、心ある読者を捉えることなどできるはずがない。本書を支える精神とは、「反原爆の思想」である。

かつて石田忠は、人がもはや人間的・道徳的であり続けることができなくなるという意味での「極限状況」（石田『原爆体験の思想化』未来社、1986年、147頁）を生み出す原爆は、人間としてとうてい受忍できるものではないと考え、これを「反原爆の思想」と呼んだ。1985年頃の日本政府が原爆を国家の側から意味づけた「受忍論」——国をあげての戦争による犠牲を国民は受忍しなければならない——に対峙し、原爆を人間の側から意味づけたところに、石田の思想の独創性と普遍性がある。「原爆のもった最大の意味は、それが原爆否定の思想を生み出したというところに在る」（石田『反原爆』未来社、1973年、1頁）。

本書は、この石田の研究を継承している。石田に師事した著者が、恩師が長崎で被爆した福田須磨子さんの「原爆体験」の生活史を通して索出した命題——「この思想形成の必然性は被爆者の〈生〉そのものの中に在る」（『反原爆』1頁）——を仮説とし、これを被爆者6744人のデータから計量的に検証しようと試みた、その成果が本書である。

以下では、右の「仮説」を仮に「反原爆の思想」の形成メカニズムと呼んで筆を進めるが、著者は、このメカニズムの検証を二つの課題の解明という形式で遂行しようとしている。1. 「被爆したためにつらかったこと」が、ついには人びとから「生きる意欲」を奪っていく過程——漂流の必然性——を解明すること。2. そのような原爆に対する人間の闘いの過程——抵抗の可能性——を捉えること（本書、xiii-xiv頁）。

その際、両者は相互に関連づけて分析されなければならない。なぜならば、「原爆とのつばぜり合い」こそが、被爆者の生き方そのものであると考えるからである。石田は言う、「被爆者を理解しようと思うならば、常に人間を否定する力としてのみ働く原爆と、それに抗って生きていこうとする人間と、その二つの力のつばぜり合いとして被爆者というものをとらえなければなりません」(本書、xii-xiii頁)。

結論を先取りすれば、本書で石田の命題は証明されている。調査方法論としては、質的調査による仮説索出と量的調査による仮説検証の相互補完関係が世代を越えて確保されている点がよく興味深い。本書の方法論には後でやや詳しく言及しようと思うが、世代を越えた「相互補完関係」を成功に導いた要因には、堅牢な分析枠組みに加えて、次のような長く地道な調査・集計・分析の努力があったと推察される。

本書のデータの基礎は、被爆40年目にあたる1985年に実施された日本原水爆被害者団体協議会「原爆被害者調査」である。この調査は、同年、これに先行した厚生省「昭和60年度原子爆弾被爆者実態調査」に対する「対抗調査」として実施されている。著者たちは厚生省調査を前述の「受忍論」に基づくものであると批判し、「反原爆の思想」に基づく調査のあり方を示して、その目的を次の二点に定めている。1. 40年後の今なお続く被害者・遺族の苦しみや不安を、原爆被爆との関連で明らかにすること。2. それらの被害がどれほど人間性に反するものであるかを明らかにすること。石田の言う「原爆体験の全体像」の探究である。

それだけに、調査はきわめて大がかりであった。全27問(加えて補問等) = 28頁にわたる大部の調査票を用いて、全国13168人の原爆生存者から有効票を回収し、その調査原票は37万頁に達したという。サンプリングの手続きが説明

されていないが、それは別稿に当たれば分かるだろう(たとえば、浜谷『「原爆被害者調査」の立場と構想』『一橋大学研究年報』27, 1989年, 75-76頁)。ともあれ、どの設問にも自由記述欄(おそらく大枠の)が設けられており、それを全文データベースとして資料化できているのは今だにごく一部であるという(本書, 253頁)。ここに、本書をまとめるのに20年の長きを要した事情の一端がうかがえる。

前述したように、本書はただ一つの仮説——「反原爆の思想」の形成メカニズム——の検証に焦点を絞っている。その検証に必要な質問項目が調査票には7問あり、その全てに答えているサンプルのみを13168人の中から取り出した結果が、本書副題の「六七四四人」である。本書で扱っていない質問項目と未入力 of 自由回答を用いた研究が、今後の課題であるとする。

以上、本書の目的、仮説と分析枠組み、調査の経緯と概要などに触れてきた。その多くは本論に先立つ「はじめに」に述べられている、いわば本書の背景である。あえて「背景」に書評のスペースを大きく割いた理由は、研究という観点から本書を理解するためには、これが世代を越えて継承されたテーマとデータの上に成り立っていることを十分に踏まえておく必要があると思われたからである。本書は世代継承型研究としてきわめてユニークである。その方法論に立ち入る前に、本書の構成を見ておきたい。

まず、「漂流の必然性」が、次の手続きで説明されている。「被爆したためにつらかったこと」を、心の傷、体の傷、不安、これら三側面から明らかにするために、それぞれに1章を充てている。第一章「心の傷」とは、原爆投下の日(以下、著者にならって「あの日」とその直後の出来事が、深く心の傷あとになって残っていることをいう。第二章「体の傷」とは、

「あの日」はかろうじて死をまぬがれたものの、その後には病がちとなり、さらには死にいたることをいう。そして第三章「不安」とは、健康への不安や、子供を産むことに対する不安など、被爆したが故に日々襲ってくるさまざまな不安のことである。以上を踏まえた第四章「〈原爆〉にあらがう」で、これら「被爆したためにつらかったこと」が「生きる意欲の喪失」と正相関していることを幾つかの指標から明らかにすることによって、「漂流の必然性」を検証する。

つぎに「抵抗の可能性」に関しても、同第四章で、やはり幾つかの指標を用いて「生きる意欲の喪失」の経験が深い者ほど「反原爆」を生きる支えにしているとの正の相関関係を明らかにし、これを検証する。ここに、被爆者たちの中に「反原爆の思想」の形成メカニズムが存在していることが、量的調査によって初めて証明されたのである。

最終章の第五章「戦なき世を」では、原爆の人間の意味——原爆は人間がもはや人間的・道徳的であり続けることができなくなる極限状況を生み出す——に再度言及し、それが故に「核廃絶」と「国家の戦争責任の制度化」の必要性を強く訴えて本書は結ばれている。

私は原爆被害者研究の専門家ではないが、本書には社会調査方法論としても学ぶべき点が多い。世代継承型研究というユニークな特徴もある。ここでは社会調査に従事する一人として、以下のコメントを記させていただきたい。

1. 方法論的個人主義による実証研究において、質的調査による仮説索出と量的調査による仮説検証の相互補完関係は一つの理想的なコンビネーションだが、本書はこれをみごとに体現している。

かつて石田が被爆者の生活史から索出した「反原爆の思想」の形成メカニズムに関する仮

説的命題を、著者が量的調査によって検証しようと試みた。石田の命題に対しては、これまでも実証への期待が度々寄せられてきた。管見ながら、木本喜美子の『原爆体験の思想化』の書評（『社会学評論』150, 1987年, 252頁）や、稲月正の『反原爆』へのコメント（『国内文献解題』, 谷編『ライフ・ヒストリーを学ぶ人のために』世界思想社, 1996年, 297頁）などがある。これらの期待に、著者が世代を越えて応えている。

2. 本書はまた、社会調査の生命線がインフォーマントによる「調査目的への共感」であることを身をもって示してくれている。

被団協調査の調査票には「あの日や、その直後のことで、いまでも忘れられないこと、恐ろしく思っていること、心のこりなこと、などがありますか（以下略）」という自由記述式の質問（以下「あの日の証言」）がある。つぎは、その回答例である。

「防空壕に入れてくれと泣きさけぶ」人の「希望を聞けず、自分だけ入った」こと、「後で助けに来ると見捨てた」こと、「せめて最後の水の一滴なりと与えて上げれば」……、折りに触れて人は、「非人道なことをした」と心がいたみ、「人間としてこれでよかったのか」という思いが「いつまでも心に残る」（本書, 11-12頁）。

第一章「心の傷」には類似の回答が約200例ほど引用されているが、どれも、ある意味で二度と思い出したくない、人に話したくない体験ばかりである。読む側にとっても目をそむけたくなるものがある（私も何度読むことを断念しようと思ったことか）。にもかかわらず、全回答者13168人のうちの63%（約8300人！）の人が回答してくれたという。なぜだろう。それ

は、当時の原爆被害者援護法の制定などをめぐる時代状況を背景に、回答者たちが石田の「反原爆の思想」に共感したからに違いない。「極限状況」を生み出す原爆は受忍できない。このことを訴えるためには、どうしても原爆が「極限状況」を生み出すことを事実として示していく必要がある。著者たちは、このことを被害者たちに粘り強く説いたのだと思う。

私は、本書ほど困難なテーマを抱えた社会調査をあまり知らない。本書は、いかに困難なテーマであっても、対象者から調査目的に対する理解さえ得られるならば（じつは、これこそ調査の最大の難関である）、何とか完遂できるものであるということを示唆してくれた。

以上の意味において、原爆被爆者研究の優れた一成果である本書は、同時に社会調査の優れたテキストとしても、末永く参照されるべきであろう。

3. 原爆体験に対する「人間の視点」が継承され、いっそう追究されている。

かつて石田は、「あの日の証言」の中で「人間」という言葉を含む証言に注目したという。そこには原爆に対する批判的認識が語られていることに気づいたからである。著者は分析にあたって、この視点をいっそう深めようとしている。その表れの一つは、「あの日の証言」全文データベースから「人間」を検索語として該当事例を取り出すコンピュータ・プログラムの利用である。これによって、「あの日の証言」八千件以上のデータ処理は飛躍的に進んだことであろう。先の引用もその一例である。

また、人間の視点からの著者によるオリジナルな知見も少なくない。たとえば、著者は「子ども・女・年寄り」に着目した。調査では身内の被爆死について尋ねているが、その集計結果から、原爆投下日の死者のじつに66%が「子ども・女・年寄り」であることがわかった。「反

原爆の思想」は、戦闘員以外を大量に巻き込む原爆の非人間性を批判する。その批判の根拠として、「66%」という数字の持つ意味はたいへん重いと思う。

ちなみに、本書には「反原爆の思想」を徹底的に数字に語らせる、という側面がある。もう一つ例をあげれば、原爆投下日の死者のうち、50%が「建物による圧焼死」、34%が「戸外での爆死」であったという。この合計84%という数字は、「原爆は、人びとに逃げる暇も与えず、押し潰され焼け死んでしまう人びとを助け出すことさえ許さなかった」（本書、22-23頁）、その残虐性を物語って説得的ではないか。

4. こうした数字の夥しい数々が、これも夥しい件数の「あの日の証言」と織りなして、本書全編に核廃絶を訴える人間たちの声が響き渡っている。

私は本稿冒頭で、著者は「原爆体験」を専門分野を越えて広く世に伝えたいと願っているのではないかと勝手に推測したが、本書は、もつと広く国境を越えて読まれるだけの価値があると思う。本書が「反原爆の思想」の形成メカニズムを数量的に実証したことによって、この思想の独創性と普遍性のレベルをさらに高く押し上げた功績は大である。人間の「極限状況」から構築された反原爆の論理は、あらゆる戦争に適用可能なはずである。もしかしたら、すでに翻訳の作業は開始されているのかもしれない。戦後60年という節目の年に公刊された意義もさることながら、今日の国内・国際情勢に照らして、本書が「反原爆の思想」の国際的な普及に貢献されんことを願う者は私一人ではないだろう。

（濱谷正晴著『原爆体験一六七四四人・死と生の証言』岩波書店、2005年6月、xxviii+265頁、定価2800円+税）

（たに・とみお 大阪市立大学大学院教授）